



## 有田焼を支えた 組合の歴史

平成28年、2016年に創業400年を迎える有田焼の業界は、江戸時代には窯焼き（本焼き業）、赤絵屋（上絵付け業）とに区別された厳格な分業体制でした。

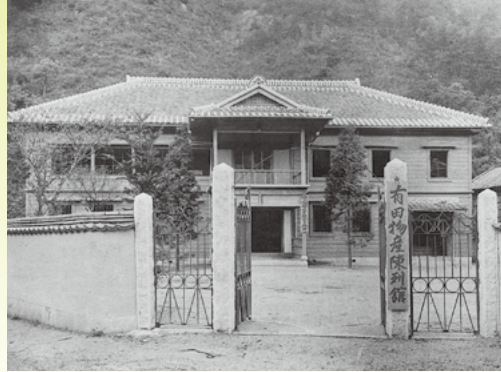
それが明治となって佐賀藩が消滅し、一応建前は誰でも自由に焼物を作ることができるようになった反面、技術の低下や原料の流失を憂えた窯焼き同業者は、明治9年（1876）に「陶業盟約」という自主的な規則を制定しました。

また、当時日本各地で盛んに行われたのが「集談会」というもので、これは産業を振興し、生産の増大・改良を図ることを目的としました。一種類または数種類の産業関係者を集めて、各自の意見または経験を発表し、それについて参会者が互いに意見を交換するという形式の談話会でしたが、この議事の内容を印刷して発行した結果、当業者が刺激を受け啓発されて事業の改良発達を促し、同業組合結成の機運が盛り上がりました。

陶磁器業界でも明治18年に集談会員によって「陶業組合条例の儀に付き建言書」が政府に提出され、翌19年には鎌田景弼佐賀県知事が、「日に日に衰退の状況をきたし、したがって粗製濫造し、いたずらに目前の細利をこれ図るもの少なからずやに相聞こえ、今にしてこれが弊害を矯正せざんば、とうてい挽回の期あるべからず」と製造業、販売業を問わず、陶業組合の設立を促しています。

その後、明治23年2月に佐賀県庁の認可を受け、正式に有田陶磁業組合が発足しています。さらに25年8月には有田窯焼き全員を会員とする有田磁業会が創立されました。当時の有田は磁器の原料を採掘する石場の所有を巡って「石場騒動」という町を二分する大きな対立がありましたが、26年になって一応その紛争も和解が成立したので、これを機に窯焼き、商人、赤絵付け業者が一同となって有田町商工会（有田商工会議所の前身）を結成し、陶業の発展を図ることになりました。

29年8月には香蘭社社長9代深川栄左衛門ほか10数名の発起により、資本金65,000円で有田磁器合資会社を設立し、磁器受託販売を行うことになりました。



大樽にあった有田物産陳列館（現在の有田商工会議所）内に、西松浦郡陶磁器同業組合の事務所がおかれた。左はその議事録など。（有田町歴史民俗資料館蔵）

明治31年2月28日、佐賀県庁内において重要品輸出組合法により、陶磁器業組合諮問会が開かれ、藤津郡、杵島郡をはじめ西松浦郡からは有田磁器合資会社社長田代呈一、9代深川栄左衛門ら10人が出席しました。それを受けて3月26日付けて陶磁器同業組合の設立が認可され（佐賀県統計書では、西松浦郡陶磁器同業組合の設立認可年月は明治33年3月）、事務所は前述の有田磁器合資会社内に置かれました。

昭和5年、10代深川栄左衛門を理事長に有田陶磁器工業組合が発立され、陶土・石膏・燃料など諸費用の低減を図るため共同購入を行い、また製品の共同販売、倉庫利用事業、貯金受け入れ、資金貸付などを行って、組合員の金融を図るようになりました。

しかし、次第に戦局の色が濃くなっていった昭和18年、有田陶磁器工業組合、有田陶磁器錦付工業組合（昭和10年創立）、藤津陶磁器工業組合の3つの工業組合代表は合併について協議し、肥前陶磁器工業組合が発足しましたが、翌19年には佐賀県陶磁器工業統制組合と名称を変更し、陶磁器の生産・検査・出荷の統制業務、燃料の共同購入などで、戦時下での活発な事業をおこないました。

戦後、昭和26年には肥前地区の陶磁器販売業者と生産業者が流通の合理化を図る中で、相互扶助の精神に基づき共販業務、入札会の実施など商工一体となった肥前陶磁器商工協同組合が発足。38年には有田焼直売協同組合、45年に有田焼卸商業協同組合と続き、54年に大有田焼振興協同組合が発足しました。

いずれの組合も設立にあたっては伝統ある有田焼の名声をさらに高め、有田焼という宝を中心に商工互いに共生していくことが目的であったと思います。たとえ形は変わっても、その理念、思いを次世代へ伝えていく努力が、現在に生きる我われに課せられているのではないのでしょうか。

（尾崎葉子）

# 皿 季刊 山

No.75

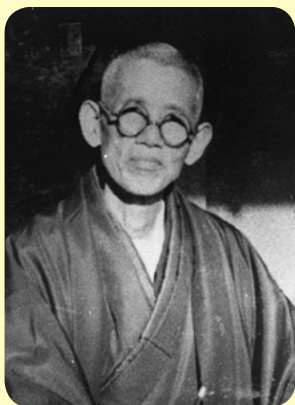
# 秋

2007

有田町歴史民俗資料館・館報

このほど有田町歴史民俗資料館叢書『有田皿山遠景』を出版しましたが、その中で取り上げた『肥前陶磁史考』（昭和11年発刊）の著者である中島

浩氣さんの子孫雪竹欽哉さん（神奈川県葉山町在住、企画表現研究所主宰）から、共に暮らしたころの祖父の思い出を綴った一文をいただきました。



77歳のころの中島浩氣さん  
（神奈川県の実家で）

## 「有田皿山遠景」雑感

### —祖父中島浩氣の思い出

雪竹 欽哉

いきなり名前のお話で恐縮だが、私の名は欽哉。名付け親は祖父中島浩氣である。雪竹の家に三人姉弟の長男として生まれたが、祖父の喜びようも一入で「欽しき哉、欽しき哉」とそのまま命名したという。生まれただばかりの私を内懐に入れて、戦時色が深まる世田谷の街を毎日のように散歩していた、と母多枝子からよく聴かされた。戦争の記憶で残っているものは殆どないが、今でも、空襲警報の最中誰かに抱かれて青空を振り仰ぐと、大きな黒い飛行機（B29）が白い小さな飛行機に追われて逃げていく姿をかすかながら思い浮かべることがある。もしかするとこの誰かは祖父だったのかもしれない。

疎開中の有田での祖父の行動は全く覚えていないが、世田谷で執筆中の祖父の写真から判断すると、すでに構想を練っていたであろう『肥前陶磁史考』改訂のため、執筆に集中したり、資料集めに奔走していたことは想像に難くない。

戦後、私達親子五人と祖父、祖母七人の葉山での生活が始まった。金子堅太郎（溪水堅）筆の「撫松庵」という懸額のある茶室風の家で、七人が寝るのがやっとという狭さだった。その一角を占めて、膨大な資料と『有田皿山遠景』でも触れているボロボロになった漢和辞典（今この辞書は姉が大切に保管している）を片手に執筆に勤しんでいた祖父の姿が思い浮かべられる。執筆中、私達子供が傍で悪戯したり騒いだりする

と「コーンチクショウ！」と言って、いつも使っている孫の手で畳をパチンとたたいて叱ったものだ。

無論本気で怒っているわけではない。普段はやさしく私達にとっては、朝から夜遅くまで仕事に出掛けている父助三に代わって、父親のような存在でもあった。また、その博学多才ぶりを遺憾なく発揮し、図鑑すら手に入りにくい時代にあつて「生き字引」として、私達にいろいろな知識を披露してくれた。時には、物語や民話などを聞かせてくれたり、自作の小話を面白おかしく話しては家族を笑わせたりしていた。

中でも私に影響を与えたのは「俳句」である。『有田皿山遠景』にも紹介されているが、祖父はアララギ派の俳人で「桜溪」と号していた。今でも十数句は誦んじているが、自薦の二百数句を纏めた句集を、私達が読めるように脇にペン字楷書書きを付けて残してくれている。また、その内五十句は短冊に書き記してあり、かつて我が家に床の間や短冊掛けがあつた頃には、季節ごとに句を入れ替えるのは私の楽しみでもあった。勿論これらは私の手元に現存している。

祖父の句の中で「二比丘尼」の句も好きだが、もっとも気に入っていたのは「箱詰めの 四角の蜜柑 甘かりし」と「雪中や あんころころり ちんころり」の二句である。前句は佐野青陽人の選評がついており、後の句は句集には載せられていないが、二匹のかわいい子犬が雪の中で転げまわっている絵が添えられていた。

絵と言えば、画工であつた祖父の力を大いに借りて友達や先生に喜ばれたことがある。小学校の大半をクリスチャンの母の関係で、近くの小さなミッションスクールに通っていたが、クリスマスに学芸会があり、そこで使用するいろいろな動物の仮面を祖父が作ってくれたのである。動物の顔を正面から描いたもので、絵心のある人でも参考文献の少ない中ではなかなか難しいことであつた。馬、狐、羊などはそれらしく描いてくれたが、さすがの祖父も苦勞したのは駱駝の顔である。当時、上野動物園にも駱駝はおらず、絵本などに出ていた横向きの駱駝から想像して何とか仕上げてくれたが、こんなに自信のなさそうな祖父を見るのは珍しいことであつた。今見たら相当奇妙なものだらうが、その時は誰も知らないのだから、皆喜んで使っていた。これがきっかけで動物の顔を中心とした画集を作ってくれたり、植物辞典2冊、動物辞典、昆虫辞典、鳥類辞典、魚類辞典各1冊を編纂してくれたりした。辞典類はB5、和綴じ本ですべて毛筆書きである。あらためてこれらを見るにつけ、いかに几帳面で博学であつたかが分かる。



中学三年進級を前にした昭和30年3月5日、祖父は大仕事をなし終えた安堵感からか静かにその余生を閉じた。祖父の寝ていた近くの雪見障子が引き上げられていて、外は小雪がちらつく寒い日だったという印象がある。

今回の『有田皿山遠景』の発刊は、私に再度祖父の業績を見直し「まだ手を付けていない肥前陶磁史考を完読せよ」と迫っている様な気がする。そろそろ重い腰を上げなければいけないのかもしれない。

## 「有田皿山遠景」の朗読会

さる7月25日(水)、有田町内で朗読や読み聞かせのボランティア活動をされている八尋典子さん・橋口由紀子さん・林洋子さんにお願ひし、有田町社会福祉協議会のデイサービスセンター（南原）で『有田皿山遠景』を朗読していただきました。

当館にとっては初めての試みでしたが、「姑がむさぼるように読んでいた」という女性の声がかきつけて、高齢者の方にとってはなつかしい有田を思い出していただけるのではないかと、また活字を読むのはおっくうだという方にも楽しんでいただけるのではないかとということで計画しました。

有田工業学校の校舎のこと、有田尋常高等小学校の校舎の話や落第があった昔の子供たち、それでも家の手伝いや遊びに夢中になっていた昔の話など、約30分の朗読に「昔の子供たち」である利用者は、時にうなずきながら話に耳を傾けていました。

今後もこの活動を続けていきたいと思っておりますので、『有田皿山遠景』の朗読をご希望のグループがありましたら、当館までご連絡ください。



朗読をする八尋さんら

## 夏休みの資料館

### ミニ企画展 “戦争と有田皿山 II” 開催

期間 8月1日(水)～8月31日(金)

昨年に引き続き、今年も8月のこの季節に平和ということを考えていただきたいということで、「戦争と有田皿山 II」のミニ企画展を開催しました。今回は新聞で報じられた戦時中の有田の記事と、それに関わる古い写真を中心に展示しました。



展示の様子

## 町屋の模型作り教室開催

8月20日(月)から21日(火)にかけて、恒例となった「町屋の模型作り教室」を開催しました。昨年から新たに曲川、大山各小学校からの参加者が増えましたが、今回は伊万里市からも応募があり、8名の参加者でした。

毎年少しずつ趣向を変えていますが、今回は内部のたんすや箱階段など、有田の町屋の特色を出した作品ができました。

今回の参加者は次の方々です。



黙々と作業を進める子どもたち

- 〈有田小学校〉 相原 寛史くん、本島 匠悟くん
- 〈中部小学校〉 樋口 尚朗くん、諸岡 拓弥くん
- 〈大山小学校〉 前田健士郎くん、前田 浩柁くん  
藤 裕人くん
- 〈立花小学校〉 前田修太朗くん

## 未来に伝える文化遺産 〈有田町の文化財〉紹介

# 天狗谷窯跡

天狗谷窯は泉山磁石場とともに有田の陶祖とされる「李参平」（日本名：金ヶ江三兵衛）ゆかりの史跡です。有田のシンボリックな存在となっています。江戸時代後期に金ヶ江三兵衛の子孫が先祖の由緒を記した文書には、三兵衛は泉山磁石場を発見して、最初は天狗谷に窯を築いたとあります。三兵衛と同じく泉山磁石場の発見に関わったと伝えられる家永正右衛門の子孫もまた先祖の由緒について同様のことを記しています。誰が第一発見者であったかどうかはともかく、当時、有田皿山の始まりとして、山に分け入って泉山磁石場を探し当て、そして、天狗谷窯を築いたという物語が有田ではすでに受け入れられていたのでしょう。

今の有田があるのは泉山磁石場の発見のおかげです。泉山磁石場の良質で豊富な陶石によって、それまで中国などから多くを輸入するほかなかった磁器を我が国で初めて本格的に量産できるようになりました。そして、泉山磁石場の発見後に磁器の生産だけで産業としてやっていこうとした窯が天狗谷窯でした。その目論みは見事にあたります。農業とも陶器生産とも切り離れて「有田焼」という産業となり、わずか数十年後には国内市場だけでなく、海外にまで輸出されるほど大きく産業が成長しました。泉山磁石場といつもセットで語られる天狗谷窯は有田焼にとってはもちろんのこと日本の窯業にとっても記念碑的な窯と言えるでしょう。



昭和40年代発掘当時の天狗谷窯跡

天狗谷窯はその歴史的価値のため、昭和55年（1980）に泉山磁石場などともに国史跡に指定されました。現在、史跡公園として活用するために、平成21年度の完成を目指して整備工事を行っています。

（野上建紀）

## 秋の企画展のお知らせ



©Taizo Ichinose

自然環境が抜群の有田町歴史民俗資料館の周辺は、一年のうちでもっとも美しい景色となるのが秋です。その時期に合わせて毎年企画展を開催していますが、今年度は以前も開催した、武雄市出身で戦場カメラマンとして活躍した故一ノ瀬泰造さんが残したネガフィルムをもとに写真展を開催します。

一ノ瀬さんの生誕60年を記念して、同時期に武雄市では市内各所で「TAIZO+TAKEO」展が開催されますが、それに呼応する形で有田では下記の要領で企画しました。

戦場を中心に活躍した一ノ瀬さんでしたが、ライフワークと決めていたのは、実は平和な有田の風景を撮ることでした。そのことも知ってもらいたいという、武雄市在住の母信子さんのご好意によるもので、昭和40年代のなつかしい有田の風景が満載です。

秋の泉山周辺は国の天然記念物に指定されている大イチョウを筆頭に、もみじなど色とりどりの紅葉を見ることができます。中でも当館の周辺は最高の色合いになると職員一同自負しています。是非、この期間に紅葉見物がてら、一ノ瀬泰造写真展へ足をお運びください。

- ・ 名 称 「有田の匂い2〜一ノ瀬泰造写真展」
- ・ 期 間 平成19年11月1日(木)～11月30日(金)
- ・ 開館時間 午前9時～午後4時30分
- ・ 入館料 無 料

## 季刊『皿山』

通巻75号（平成19年9月1日）  
編集・発行 有田町歴史民俗資料館

〒844-0001 佐賀県西松浦郡有田町泉山1丁目4-1  
☎0955-43-2678 FAX0955-43-4185